

投稿論文

## 『顔魯公文集』 内容一覧稿」補論

——安国活字本の影印によせて——

宮 崎 洋 一

### はじめに

筆者は、拙稿「『顔魯公文集』 内容一覧稿」<sup>1)</sup>（以下、前稿）において、顔真卿の詩文を集めた『顔魯公文集』の諸本のうち、一般に参照される本の系統を、書名と巻数によって以下のように整理した。

- ① 顔魯公文集十五卷補遺一卷年譜一卷附録一卷
- ② 魯公文集十五卷
- ③ 顔魯公文集二十卷補遺一卷年譜一卷附録一卷
- ④ 文忠集十六卷拾遺四卷（『武英殿聚珍版書』所収）
- ⑤ 顔魯公文集十四卷（『乾坤正気集』所収）
- ⑥ 顔魯公文集三十卷補遺一卷（『三長物齋叢書』所収）

前稿で参照できた本は、①②④⑥の系統のうちの、主なものだけ限られていたが、その後の調査によって、③⑤の系統だけでなく、①②④⑥の本の多くも実査することが出来た。さらに、①の系統のうち未見だった明の安国による銅活字本の『顔魯公文集』が、最近『中華再造善本』の一つとして影印された<sup>2)</sup>。

本稿は、前稿での系統の整理を承けて、筆者が実査した諸本の報告を行うとともに、明の安国の作った刻本と活字本の違いを中心に、諸本の関係について整理しようとするものである。

### 一 『顔魯公文集』の現存諸本について

本節では、前稿の6系統それぞれに属する諸本について、基本的な特徴を整理する<sup>3)</sup>。なお、本稿では、前稿での系統の⑤と⑥を入れ替え、それぞれに「系」の名前を付けるとともに、○印の番号を改めた。各本の下線は、本稿で引用する際の略称である<sup>4)</sup>。

#### 1. 安国本系 顔魯公文集十五卷補遺一卷年譜一卷附録一卷

書名が「顔魯公文集」で15巻、さらに補遺・年譜・附録各1巻がついているもので、下記に整理するように、この系統の版本・抄本は数種が作られてい

るが、現在ではその多くが善本となっている。(1-6)は未見であるが、(1-1)安国刻本から(1-5)顔崇榘本までの諸本は、(1-4)四庫全書本の補遺に増補がある他は、収められた詩文に大きな違いはない。

(1-1) 明嘉靖2年(1523年)錫山安国安氏館刻本<sup>5)</sup>

10行20字。白口左右双辺。縦19.9センチ、横14.3センチ。明の安国によって作られた整版による文集で、全体は、楊一清の嘉靖2年の前序、劉敞の前序、目録、本文(15巻・補遺)、留元剛編の年譜、因亮の行状、令狐峒の神道碑銘、旧唐書本伝、新唐書本伝、留元剛の後序、都穆の嘉靖癸未(2年)の後序、となっている。現存する最も古い版本だが、次節で取り上げるように、一部に未刻の文字が残されている。日本では静嘉堂文庫に所蔵されている。それとは別本が、1919年に『四部叢刊』<sup>6)</sup>に影印されている。

(1-2) 明嘉靖錫山安国安氏館銅活字本<sup>7)</sup>

13行16字。白口、左右双辺。原書は未見であるが、前述の影印本によれば、縦19.6センチ、横14.0センチ。(1-1)安国刻本と比べると、楊一清の前序と都穆の後序はないが、それ以外の全体的な構成は変わらず、また、本文も収められた詩文とその配列に違いはない。(1-1)安国刻本と(1-2)安国活字本とは、ほぼ同じ考え方のもとに作られたと考えて良いであろう。しかし、個々の詩文について見てみると違いも存在する。詳細は次節で検討する。

(1-3) 明萬曆17年(1589年)劉思誠刻本<sup>8)</sup>

10行20字。白口左右双辺。縦20.0センチ、横14.2センチ。山海の劉思誠(1570年挙人<sup>9)</sup>)によって重刊されたもので、最初に萬曆己丑(17年)の趙惇の重刻序と羅樹声の重鐫小跋があり、各巻の最初に「山海劉思誠(重)刊」とある他は、収められた詩文の内容とその配列はもとより、行数・字数・版面の大きさ・字体・版心の書名など、いずれも(1-1)安国刻本を敷き写したように酷似した版本。国内では前田育徳会尊経閣文庫に所蔵されている。それとは別本の巻首の書影が『書論』27<sup>10)</sup>の口絵に掲載されている以外は、全体の影印本はない。

(1-4) 清『四庫全書』所収本(書名「顔魯公集」, 16巻)<sup>11)</sup>

8行21字。書名が「顔魯公集」で、巻数は16巻である。内容は、総目、提要、劉敞の前序、本文(16巻)、留元剛編の年譜、因亮の行状、令狐峒の神道碑銘、となっており、巻1～15は(1-1)安国刻本と同じで、最後の巻16が安国刻本の「補遺」に当たるが、安国刻本の「補遺」に比べると、数種の詩文の増補がある。原書は未見であるが、『四庫全書』全体の

影印に収められた本<sup>12)</sup>と単行の影印本<sup>13)</sup>がある。

(1-5) 清嘉慶7年(1802年) 顔崇榘刻本<sup>14)</sup>

12行20字。白口左右双辺。縦18.0センチ、横13.9センチ。巻首に「文林郎、江蘇興化縣知縣、三十代孫」とある顔崇榘によって校刊されたもの。『顔氏集七種』の一つとしてまとめられていることもある<sup>15)</sup>。全体は、孫星衍(1753~1818年)の叙、劉敞の序、留元剛の序、都穆の序、楊一清の序、目録、本文(15巻・補遺)、旧唐書本伝、新唐書本伝、因亮の行状、留元剛編の年譜、令狐峒の神道碑銘、となっている。孫星衍の叙があること、劉敞・留元剛・都穆・楊一清の序文の位置と配列が異なっていること、半丁の行数が2行多いこと以外は、収められた詩文の内容とその配列、および版心の書名など、いずれも(1-1)安国刻本と同じ版本。国内では愛媛大学付属図書館に所蔵されている。それとは別本の巻首の書影が『書論』27<sup>16)</sup>の口絵に掲載されている以外は、全体の影印本はない。

(1-6) 明抄本<sup>17)</sup>、清抄本<sup>18)</sup>

中国に蔵される抄本は、いずれも未見。

2. **顔胤祚本系** 魯公文集十五卷

巻数は1. 安国本系と同じ15巻だが、補遺・年譜・附録はなく、書名も「魯公文集」となっているもの。

(2-1) 明萬曆24年(1596年) 顔胤祚刻本<sup>19)</sup>

10行21字。白口左右双辺。縦21.0センチ、横14.6センチ。直系ではないが顔真卿の世代から26世孫に当たる顔胤祚<sup>20)</sup>による刊本。全体、最初に、戴燾の萬曆24年の序、楊一清の嘉靖2年の前序、劉敞の前序、目録、本文(15巻)、因亮の行状、令狐峒の神道碑銘、旧唐書本伝、新唐書本伝、留元剛の後序、都穆の後序、張居仁の萬曆丙申(24年)の後跋となっている。『四庫全書総目提要』巻149によれば、清代前期までは最も流布していた版本で<sup>21)</sup>、日本にも前田育徳会尊経閣文庫と国立公文書館に所蔵されており、紙質や刷りの状態が異なるなど、時期を変えて繰り返し印刷されたものと思われる。一部を含めて影印本はないが、深谷周道氏の訳注<sup>22)</sup>は、この本からの抄本によっている。

(2-2) 清宣統2年(1910年) 守政書局刻本<sup>23)</sup>

9行21字。未見であるが、書名・巻数・1行の字数などから(2-1)顔胤祚本の再刊であろうと思われる。

3. **顔欲章本系** 顔魯公文集二十巻補遺一卷年譜一卷附録一卷

1. 安国本系と同じく、書名は「顔魯公文集」で補遺・年譜・附録各1巻がつ

いているが、20巻のもの。

(3-1) 明萬曆36年(1608年) 顔欲章輯刻本

9行19字。白口左右双辺。縦20.3センチ、横14.3センチ。これまでほとんど利用されたことはないが、古い版本である。もとは、『顔氏伝書八種』の一つとして刊行されたと思われるが、単行として所蔵されている本もある<sup>24)</sup>。筆者が調査した国立公文書館所蔵本には一部に錯簡があるが、全体は、劉敞の前序、目録、本文(1~17巻)、因亮の行状と令狐峒の神道碑銘(巻18)、顔欲章編と題された年譜(巻19)、旧唐書本伝と新唐書本伝(巻20)、留元剛の後序、姚士舜の跋となっていたと思われる。(1-1) 安国刻本に比べて、詩文が増補されているのが特徴である。付表1は、この本に収められた詩文を、前稿の付表での分類と題名にあわせて整理したものである。巻数と丁数・表裏をそれぞれの詩文の後に記すとともに、明代に作られた(1-1) 安国刻本・(2-1) 顔胤祚本と比較して、この本にのみ収められている詩文を太字で記した。特に、墓碑・碑銘に分類される文の中に、明代の文集ではこの本にしか収められていない文があることがわかる<sup>25)</sup>。一部を含めて影印本はない。

4. **聚珍版書系** 文忠集十六卷(拾遺四卷)

『武英殿聚珍版書』に収められ<sup>26)</sup>、書名が「文忠集」で16巻のもの。

(4-1) 清乾隆中武英殿木活字排印本(十六卷)

9行21字。白口四周双辺。縦19.1センチ、横12.9センチ。書名が「文忠集」となっている理由は不明。全体は、御製題武英殿聚珍版十韻有序、目録、提要、劉敞の前序、本文(16巻)となっている。巻1~15は(1-1) 安国整版と同じで、巻16が補遺となっているのは(1-4) 四庫全書本と同じであるが、その補遺の内容は、(1-1) 安国刻本とも(1-4) 四庫全書本とも異なっている。国内では静嘉堂文庫に所蔵されている。それとは別本が、『百部叢書集成』<sup>27)</sup>に影印されている。

(4-2) 清道光年間刊本(十六卷)

9行21字。白口四周双辺。縦19.0センチ、横12.7センチ。『武英殿聚珍版書』の再版は複数あって<sup>28)</sup>、その整理は必ずしも十分でないが、上記(4-1) 武英殿木活字本の整版による再刊本の一つで、内容も、最初にあった御製題武英殿聚珍版十韻有序がない以外は、(4-1) 武英殿木活字本と同じ。国内では東京大学総合図書館などに所蔵されており、最初のその目録では「乾隆末福建刊、道光二十七年會稽陳慶偕修、同治十年吳縣潘霽再修本」となっている<sup>29)</sup>が、次の(4-3) 福建刊本とは、前後の書籍の配列<sup>30)</sup>や刷られた紙が異なっている。

## (4-3) 清福建刊本道光同治遞修本（十六卷）

9行21字。白口四周双辺。縦19.1センチ，横12.4センチ。東京大学東洋文化研究所などの所蔵されており，上述のように，（4-2）道光刊本とは，書籍の配列<sup>31)</sup>や紙質の異なる版本。ただ，版自体は同じである可能性もあり，『中国叢書綜録』をはじめ，上記（4-2）道光刊本と（4-3）福建刊本とをあわせて記していると思われる目録もある。内容は，上記（4-2）道光刊本と同じ。

## (4-4) 清光緒25年（1899年）広東広雅書局増刊本（十六卷拾遺四卷）

9行21字。原書は未見であるが，漢籍データベースに載せられた，京都大学人文科学研究所蔵本の書影<sup>32)</sup>によれば，白口四周双辺。縦18.4センチ，横13.0センチ。内容は，巻1～巻16までが（4-2）道光刊本と同じ。さらにその後拾遺4巻が増補されており，拾遺巻1～巻3が顔真卿の詩文で，これは後述する（5-1）黄本驥本からの増補である。巻4は留元剛編の年譜，孫星華の光緒庚午（20年，西暦1894年）の識語。この本に基づいて排印断句された本が，に『叢書集成初編』<sup>33)</sup>に収められ，この排印断句本は，『叢書集成新編』第59冊<sup>34)</sup>などに影印されている。

## 5. 黄本驥本系 顔魯公文集三十卷（補遺一卷）

『三長物齋叢書』<sup>35)</sup>に収められ，書名は1. 安国本系と同じく「顔魯公文集」だが，巻数が30巻補遺1巻となっているもの。

## (5-1) 清道光25年（1845年）黄本驥刻本

10行21字。白口四周双辺。縦18.4センチ，横13.3センチ。清末の黄本驥（1781～1856年）<sup>36)</sup>によって編集され，湘陰の蔣瓌によって刊行された本。その内容は，四庫全書総目提要，目録，小像と黄本驥の識語，世系表，黄本驥編の年譜，顔真卿自身が書いた詩文を集めた部分（巻1～12），顔真卿以外の人物によって書かれた顔真卿に関する詩文を集めた「外集」（巻13～20），そして顔真卿の書作品に関する史料を作品ごとに整理した「書評」（巻21～30），龍啓瑞の道光19年（1839年）の後跋，となっていて，いずれも極めて多くの資料を収集している。刊行の翌年の道光丙午（26年），「書評」と龍啓瑞の後跋の間に補遺1巻が増補された。『三長物齋叢書』自体も，筆者が調査した京都大学人文科学研究所蔵本以外にも，比較的流布しているだけでなく，『叢書集成続編』123<sup>37)</sup>にも影印されており，また，民国25年（1936年）には『四部備要』<sup>38)</sup>に排印で収められた<sup>39)</sup>。凌家民氏による点校本<sup>40)</sup>は，この本に基づいている。

## 6. 乾坤正気集本系 顔魯公文集十四卷

『乾坤正気集』<sup>41)</sup>に収められ，書名は1. 安国本系と同じ「顔魯公文集」だが，

巻数が14巻で、補遺・年譜・附録を付さないもの。

(6-1) 道光28年(1848年)涇県潘氏袁江節署刊本

12行25字。白口左右双辺。縦19.4センチ、横14.6センチ。全体は(1-1)安国刻本の巻1～14と内容・配列ともに同じ。「表」の各文の末尾につけられた批答、(1-1)安国刻本の巻15の詩、補遺・年譜・附録などは全て削除されている。『乾坤正気集』自体も比較的流布しているだけでなく、影印本<sup>42)</sup>もある。

## 二 安国刻本の未刻部分と安国活字本について

前節で指摘したように、(1-1)安国刻本は最も古い版本であるが、一部に未刻の部分が残されている。本節では、この(1-1)安国刻本の未刻部分などが、このたび影印された(1-2)安国活字本でどのようになっているかを確認するとともに、他の主な本の同じ部分の状況もあわせて確認し、『顔魯公文集』の諸本の関係を一瞥しておきたい。

付表2は、(1-1)安国刻本の未刻部分(■は刻り残して黒く印刷された部分、□は文字を入れずに空欄で印刷された部分、を示す)、および巻4「有唐開府儀同三司行尚書右丞上柱国贈太尉広平文貞公宋公神道碑銘(宋璟碑)」・巻15「登岷山觀李左相石尊聯句」「使過瑤台寺有懷門寂上人」の注部分などについて、特に(1-1)安国刻本と(1-2)安国活字本とが異なっている部分を抜き出してその違いを示すと共に、あわせてその他の、(1-3)劉思誠本・(1-4)四庫全書本・(1-5)顔崇鑾本・(2-1)顔胤祚本・(3-1)顔欲章本・(4-1)武英殿木活字本・(5-1)黃本驥本、の諸本の同じ部分を比較したものである。(以下、本文での引用箇所は、付表2で用いた(1-1)安国刻本の巻数―丁数・表裏(ab)―一行で示す。なお、15-02a-04の\_\_で記した部分は割注の左行が空欄となっている部分なので、(1-2)安国活字本・(4-1)武英殿木活字本・(5-1)黃本驥本、以外の版本の作者が、そこに文字があると思っていたかどうかは不明である。)

この付表2から指摘できることは、以下のようなことである。

- A まず(1-1)安国刻本と(1-2)安国活字本とを比較すると、(1-1)安国刻本よりも(1-2)安国活字本の方が、04-14b-02・04-17b-04などのように文字が補われていたり、04-08a-09のように本文に紛れていた注をきちんと注として記すなど、内容がより正確に記されたりしている部分が多い。楊一清の前序と都穆の後序がつけられていない理由は明らかでないが、安国は(1-1)安国刻本を作った後に、その内容を補う意図で(1-2)安国活字本を作ったものと思われる。
- B (5-1)黃本驥本を除いた清代中期までの版本では、04-14b-02や07-10a-10のように、(1-2)安国活字本と(3-1)顔欲章本にのみ共通する特徴がある。このこと

は、(1-2) 安国活字本と (3-1) 顔欲章本の二つが、他と異なる特徴を持った版本であることと、さらにこの二つの版本がほとんど普及せず、ほとんどが (1-1) 安国刻本や (2-1) 顔胤祚本の影響のもとに『顔魯公文集』が作られてきたことを示している。

- C (2-1) 顔胤祚本は、前掲の『四庫全書総目提要』は、「脱漏・舛錯、尽失其旧。(脱漏や舛錯があって、ほとんど原形を失っている。)」としており、例えば留元剛の後序と都穆の後序の間で錯簡があったりするが、04-08a-09や07-10a-10のように、重要な内容も持っている版本である。
- D (1-4) 四庫全書本と (4-1) 武英殿木活字本は、ほぼ同時期に宮中で作られたものだが、07-02a-03や08-04a-02などに違いがあるように、基づいた本に違いがあると考えられる。また、(1-4) 四庫全書本は、『四庫全書総目提要』には (1-1) 安国刻本に基づいたことが記されているが、04-14b-02のように、必ずしも (1-1) 安国刻本ばかりに基づいているとは言えない部分がある。
- E 前稿で指摘したように、(5-1) 黄本驥本は多くの新しい詩文を増補している点で、顔真卿の詩文の収集において重要な位置を占めているが、さらに、07-10a-10や15-02a-04のように、個々の詩文の校訂においても重要な内容を持っている。

## おわりに

本稿の考察によっても、前稿で指摘した、『顔魯公文集』の系統の大枠や、その普及が (5-1) 黄本驥本まで待たなければならなかった点などに、変わりはない。しかし、筆者が調査し得た『顔魯公文集』の諸本の詳細を紹介し、中でも (1-2) 安国活字本と (3-1) 顔欲章本が、清末の (5-1) 黄本驥本を除けば、重要な特徴を持っていることを明らかにすることが出来たと考えている。

## 注

- 1) 『文教国文学』46, 2002年3月, pp. 125(1)~107(19)
- 2) 国家図書館出版社, 2010年。これまでは、一部の書影が、北京図書館編『中国版刻図録(増訂版)』(文物出版社, 1961年) 図版625, および張秀民著・韓琦増訂『中国印刷史(挿図珍藏増訂版)』(浙江古籍出版社, 2006年) 図182, に影印されていた。なお、北京図書館編『北京図書館古籍善本書目』(書目文献出版社, 1987年序)や後注 3) 所掲の目録によれば、この活字本は、中国国家図書館に3種、北京大学図書館に1種があるが、影印されているものはいずれも同じ本と思われる。
- 3) 用いた目録は下記の通り。中国と台湾の公的機関に蔵される版本・抄本については、特に善本については、

『中国古籍善本書目』線装本，上海古籍出版社，1985～1996年。なお筆者が用いたのは，上海古籍出版社が1989～1998年に洋装本9冊に複印したもの。

『中国古籍善本総目』全7冊，綫装書局，2005年

『台湾公藏善本書目』『書名索引』上下・「人名索引」，国立中央図書館，1971・72年

『国家図書館善本書志初稿』全12冊，国家図書館，1996～2000年

叢書については，

『中国叢書綜録』全3冊，上海古籍出版社，1959～1962年。なお筆者が用いたのは上海古籍出版社によって1986年に補訂・縮印されたもの

『中国叢書広録』全2冊，陽海清編撰，湖北人民出版社，1999年

『中国古籍総目』『叢書部』，中国古籍総目編纂委員会編，2冊，中華書局・上海古籍出版社，2009年

- 4) なお，本節で記す諸本以外に，邵懿辰『四庫全書簡明目錄標注』巻15（『増訂四庫全書簡明目錄標注』上海古籍出版社，1979年，653頁）には，「清初顔氏刊本」の存在が記されているが，詳細は不明。
- 5) 『中国古籍善本書目』『集部』上，no. 658～659，及び末尾の「蔵書単位検索表」。
- 6) 『中国叢書綜録』1「総目」285・980頁・2「子目」1221頁。民国8年（1919年）初次影印本，民国18年（1929年）二次印本，民国25年（1935年）縮印本。
- 7) 『中国古籍善本書目』『集部』上，no. 660～662，及び末尾の「蔵書単位検索表」。
- 8) 『中国古籍善本書目』『集部』上，no. 663～665，及び末尾の「蔵書単位検索表」。
- 9) 『（雍正）畿輔通志』巻65「举人 隆慶庚午科」
- 10) 書論研究会，1991年
- 11) 『中国古籍善本書目』『叢部』no. 204～206，及びそれぞれの末尾の「蔵書単位検索表」。『中国叢書綜録』1「総目」79・962頁・2「子目」1221頁。
- 12) 筆者は，文淵閣本の影印本（台湾商務印書館，1983～87年，1071冊，585～721頁）を用いたが，文津閣本の影印（商務印書館，2005年）もある。
- 13) 『顔魯公集』（四庫唐人文集叢刊）上海古籍出版社，1992年。文淵閣本の影印である。
- 14) 『中国古籍善本書目』『集部』上，no. 668～670，及び末尾の「蔵書単位検索表」。
- 15) 中国科学院図書館編『中国科学院図書館蔵中国古籍善本書目』科学出版社，1994年，748頁。および『中国古籍総目』『叢書部』，1016頁，叢20400951。ただ，この『顔氏集七種』には，康熙年間の書籍も収められており，それぞれの刊行年にかんがりの開きがある。
- 16) 書論研究会，1991年
- 17) 『中国古籍善本書目』『集部』上，no. 667，及び末尾の「蔵書単位検索表」。



- 18) 『中国古籍善本書目』「集部」上, no. 671, 及び末尾の「蔵書単位検索表」。
- 19) 『中国古籍善本書目』「集部」上, no. 666, 及び末尾の「蔵書単位検索表」。
- 20) 『(雍正) 山東通志』巻11之6「顔氏」によれば, 顔胤祚(顔回の65世孫)は顔師古(同37世孫)の直系の子孫とあるから, 顔師古の弟の顔勤礼の曾孫である顔真卿(同40世孫)の直系の子孫ではない。
- 21) 日本国内に, この版本およびこの版本からの抄本が複数あるだけでなく, 鄭台喜「張長史十二意筆法記」(『南丁崔正均教授古稀紀念書藝術論文集』圓光大學校出版局, 1994年, pp. 737-749)がこの版本を利用しているから, 韓国でも用いられていることが知られる。
- 22) 『顔真卿』風媒社, 1974年
- 23) 『東北地区古籍線装書聯合目録』遼海出版社, 2003年, 2479頁, など。
- 24) 『中国古籍善本書目』「叢部」no. 311, 「集部」上, no. 672, 及びそれぞれの末尾の「蔵書単位検索表」。『中国叢書広録』上, 241頁。
- 25) 1921年に石碑自体が出土した「秘書省著作郎夔州都督長史上護軍顔公神道碑(顔勤礼碑)」は, 清代半ばまでの文集ではこの(3-1)顔欲章本の巻11にしか収められていないが, その刊行の時(1608年)には, すでに「銘」が不明になっていたことが知れる。
- 26) 『中国古籍善本書目』「叢部」no. 203, 及び末尾の「蔵書単位検索表」。『中国叢書綜録』1「総目」128・962頁・2「子目」1221頁。
- 27) 藝文印書館, 1969年
- 28) ここで整理した以外に, 再刊本には浙江や江西での再刊本があるが, それらには『文忠集』は収められていない。
- 29) 『東京大学総合図書館漢籍目録』東京堂出版, 1995年, 693頁。ただ, 目録にある「拾遺四卷」はもとからつけられていなかったと思われる。
- 30) 集部の明示はなく, 悦心集, 直齋書録解題, 文忠集, 張燕公集, 茶山集, 黎齋集……の順になっている。
- 31) 集部は, 悦心集, 張燕公集, 文忠集, 南陽集, 元憲集……の順で始まっている。
- 32) <http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/kanseki?record=data/FA019705/tagged/0847021.dat&back=1>
- 33) 2冊, 商務印書館, 民国25年(1936年)。
- 34) 新文豊出版公司, 1985年
- 35) 『中国叢書綜録』1「総目」183・968頁・2「子目」1221頁。
- 36) 陳玉堂『中国近現代人物名号大辞典』(全編増訂本, 浙江古籍出版社, 2005年) 1097頁の記載による。なお, 袁行雲『清人詩集叙録』第3冊(文化芸術出版社, 1994年) 2047~2048頁は生年は同じ1781年で卒年は未詳とし, 柯愈春『清人詩文

集総目提要』中（北京古籍出版社，2002年）1139頁は，卒年は同じ1856年だが生年は1780年とする。

37) 台北新文豊出版，1989年

38) 上海中華書局排印本。『中国叢書綜録』1「総目」315・984頁・2「子目」1221頁。『四部備要』も，こののちたびたび複印されている（台湾中華書局，1970年など）。

39) 『顔魯公全集』全2冊（上海仿古書店，1936年，434頁）も，この黄本驥本の排印と思われるが，筆者は未見。

40) 『顔真卿集』黒竜江人民出版社，1993年

41) 『中国叢書綜録』1「総目」820・1092頁・2「子目」1221頁。

42) 『乾坤正気集』（台北環珠書局，1966年）に影印がある。

#### 付表 1

表 皇帝即位賀上皇表02-01a，讓憲部尚書表02-02b，謝兼御史大夫表02-04b，同州刺史謝上表02-06a，蒲州刺史謝上表02-07a，謝浙西節度使表02-08a，謝戸部侍郎表02-09a，謝吏部侍郎表02-10a，謝荊南節度使表02-11a，謝贈祖官表02-12a，乞御書天下放生池碑額表02-13a

疏 論百官論事疏01-07a

狀 請復七聖謚号狀01-01a，論元皇帝祧遷狀01-03b

議 廟享議01-05b，遷獻懿二祖及禘祫議01-06b，朝会有故去樂議01-09b

書 与郭僕射書13-13b

帖 与李太保帖九首（①朝廻帖13-08a，②「千手贊檢未得」13-08a，③乞米帖13-08a，④鹿脯帖13-08a，⑤ a 奉袂帖/b 張澈帖13-08b，⑥「奏事官至蒙問」13-09a，⑦「真卿粗自奉別」13-09a，⑧ a「千手贊已領訖」/b 硤州帖13-09b），与盧倉曹帖三首（①乍奉辭帖13-10a），与蔡明遠帖二首（①蔡明遠帖13-10a，②鄒游帖13-10b），与夫人帖13-10b，寒食帖13-11b，奉使蔡州書13-11b，与澄師帖13-12a，与御史帖13-12a，与緒汝帖13-12b，広平帖13-12b，修書帖13-12b，中夏帖13-13a，文殊帖13-13a，訛後帖13-13a，移蔡帖「貞元元年正月」13-13b

序 尚書刑部侍郎贈尚書右僕射孫逖文集序14-01a，懷素上人草書歌序14-03b，送劉太冲序14-04b，送辛子序14-05a，干祿字書序14-05b

記 謝公碑陰記17-12a，東方先生画贊碑陰記14-07a，鮮于氏離堆記14-07b，撫州宝応寺律藏院戒壇記14-11a，撫州南城県麻姑山仙壇記14-14a，梁吳興太守柳惲西亭記15-01a，吳興沈氏述祖德記15-03a，乞御書題額恩勅批答碑陰記15-04b，湖州石柱記15-06a，有唐宋州官吏八閤齋会報德記15-10a，通議大夫太子賓客東都副

留守雲騎尉贈尚書左僕射博陵崔孝公宅陋室銘記16-01a, 撫州宝応寺翻經台記16-07b, 張長史十二意筆法記16-09b

述 項王碑陰述15-04a

贊 李侍御写真贊13-17b

題名 華嶽廟題名17-10b, 東林寺題名17-11a, 西林寺題名17-12a, 靖居寺題名17-11b

碑銘 天下放生池碑銘03-01a, 湖州烏程縣杼山妙喜寺碑03-03b, 東莞臧氏糾宗碑銘05-05b, 有唐故中大夫使持節壽州諸軍事壽州刺史上柱國贈太保郭公廟碑銘07-01a, 晉紫虛元君領上真司命南嶽夫人魏夫人仙壇碑銘09-01a, 撫州臨川縣井山華姑仙壇碑銘09-08a, 浪迹先生元真子張志和碑銘09-11a, 有唐茅山元靖先生広陵李君碑銘09-13b, 唐故通議大夫行薛王友柱國贈秘書少監國子祭酒太子少保顏君碑銘11-11b, 晉侍中右光祿大夫本州大中正西平靖侯顏公大宗碑銘10-08a

墓碑 有唐開府儀同三司行尚書右丞上柱國贈太尉庾平文貞公宋公神道碑銘03-06b, 唐故開府儀同三司太尉兼侍中河南副元帥都督河南淮南淮西荆南山南東道五節度行營事東都留守上柱國贈太保臨淮武穆王李公神道碑銘04-01a, 河南府參軍贈秘書丞郭君神道碑銘04-09b, 唐故右武衛將軍贈工部尚書上柱國上蔡縣開國侯臧公神道碑銘05-01a, 唐故容州都督兼御史中丞本管經略使元君表墓碑銘05-08a, 特進行左金吾衛大將軍上柱國清河郡開國公贈開府儀同三司兼夏州都督康公神道碑銘06-01a, 金紫光祿大夫守太子太傅兼宗正卿贈司空上柱國隴西郡開國公李公神道碑銘06-07b, 中散大夫京兆尹漢陽郡太守贈太子少保鮮于公神道碑銘06-10b, 銀青光祿大夫海濮饒房陸台六州刺史上柱國汲郡開國公康使君神道碑銘07-05b, 遊擊將軍左領軍兼商州刺史武闕防禦使上柱國歐陽君神道碑銘07-10b, 朝議大夫贈梁州都督上柱國徐府君神道碑銘08-01a, 京兆尹御史中丞梓遂杭三州刺史劍南東川節度使杜公神道碑銘08-06a, 曹州司法參軍秘書省麗正殿二學士殷君墓碣銘13-01a, 京兆尹兼中丞杭州刺史劍南東川節度使杜公墓誌銘13-04a, 和政公主神道碑10-01a, 朝議大夫守華州刺史上柱國贈秘書監顏君神道碑銘11-06a, 杭州錢塘縣丞殷府君夫人顏君神道碣銘12-11b, 秘書省著作郎 州都督長史上護軍顏公神道碑11-01a, 攝常山太守衛尉卿兼御史中丞贈太子太保諡忠節京兆顏公神道碑銘12-01a, 正議大夫行國子司業上柱國金鄉縣開國男顏府君神道碑銘12-03b, 朝議大夫行江陵少尹兼侍御史荆南行軍司馬上柱國顏君神道碑銘12-09a, 左衛率府兵曹參軍賜紫金魚帶顏君神道碑銘12-07a

祭文 祭姪贈贊善大夫季明文13-07a, 祭伯父豪州刺史文13-06a

詩 題杼山癸亭得暮字17-01a, 謝陸処士杼山折青桂花見寄之作17-01b, 登平望橋下作17-01b, 登峴山觀李左相石尊聯句17-05b, 水堂送諸文士戲贈潘丞聯句17-06b, 送耿漳拾遺聯句17-07a, 五雜組擬作17-07b, 月夜啜茶聯句17-07b, 重擬五雜組

17-07b, 夜宴詠燈聯句17-08a, 三言喜皇甫侍御過南樓玩月聯句17-08a, 七言重聯句17-08b, 送李侍御聯句17-08b, 玩初月重遊聯句17-09a, 重送橫飛聯句17-09a, 大言聯句17-09a, 小言聯句17-09b, 樂語聯句17-09b, 饒語聯句17-09b, 滑語聯句17-10a, 醉語聯句17-10a, 夜集聯句17-10a, 刻清遠道士詩而繼作17-02a, 使過瑤台寺有懷門寂上人17-04a, 贈僧皎然17-04b, 贈裴將軍17-05a, 斷句13-11b

付表 2

(1-1) の 巻数・丁数・ 表裏・行	(1-1) 安国刻本	(1-2) 安国活字 本	(1-3) 劉思誠本	(1-4) 四庫全書 本	(1-5) 顏崇舉本	(2-1) 顏胤祚本	(3-1) 顏欲章本	(4-1) 武英殿木 活字本	(5-1) 黃本驥本
04-08a-09 から	唐隆初～ 日景雲の 55字本文	割注	本文	本文	割注	割注	本文	割注	
04-14b-02	爲國■將	爲國飛將	爲國大將	爲國宿將	爲國大將	爲國大將	爲國飛將	爲國大將	爲國大將
04-17b-04	于河■南	于河陽南	于河陽南	于河陽南	于河陽南	于河陽南	于河陽南	于河陽南	於河陽南
07-02a-03	由之□事	由之政事	由之行事	由之□事	由之行事	由之行事	由之政事	由之政事	由之政事
07-06a-05	厥侵□君	厥侵軼君	厥侵轢君	厥侵□君	厥侵轢君	厥侵轢君	厥侵軼君	厥侵疆君	厥侵疆君
07-10a-10	圍■■■■ ■■■■浙	圍南陽君 屯兵於浙	圍■■■■ ■■■■浙	圍□□□ □□□浙	圍南陽□ □□□浙	圍南陽■ ■■■■浙	圍南陽君 屯兵於浙	圍南陽■ ■■■■浙	圍南陽君 屯兵於浙
08-04a-02	叟於■君	叟於中君	叟於洞君	叟於□君	叟於洞君	叟於洞君	叟於中君	叟於洞君	叟於洞君
08-04a-07	■日■成	□日克成	以日■成	以日□成	□日以成	以成	□日克成	時日以成	時日以成
09-03b-01	威章■入	威章奏入	威章■入	威章□入	威章奏入	威章■入	威章奏入	威章□入	威章奏入
10-02b-10	常日■有	常日泉有	常日■有	常日□有	常日及有	常日及有	常日泉有	常日及有	常日及有
10-03a-09	寇而■官	寇而君官	寇而君官	寇而□官	寇而君官	寇而君官	寇而居官	寇而君官	寇而君官
13-13a-06	去■州■ ■■■■ 南	去蘇州□ □□□□ 南	去■州■ ■■■■ 南	去蘇州二 百七十里 南	去□州□ □□□□ 南		去■州■ ■■■■ 南		去蘇州二 百一十里 南
15-02a-04	孫王_德	孫王紀德	孫王_德	孫王_德	孫王_德	孫王_德	孫王_德	孫王□德	孫王純德
15-08b-03	岌然舊本 作巖	岌然舊本 作巖然	岌然舊本 作巖	岌然舊本 作巖	岌然舊本 作巖	岌然舊本 作巖	岌然舊本 作巖	岌然舊本 作巖	岌一作巖 然

\* 貴重な資料の閲覧をお許し下さった文庫・図書館各位に深く御礼申し上げます。